論文要旨

謝罪を介した被害者と加害者の関係構築と風化への取り組み

ーJR 西福知山線脱線事故をもとにー

安西ちまり（経済学部 3 年）

指導教員：鈴木亮子教授

本論文では 2005 年の福知山線脱線事故を取り上げ、企業が市民に対して起こしてしまった過失的な事故について焦点を絞り、その謝罪行為について新聞記事から観察を行った。

福知山線脱線事故に関しては、鉄道事故にまつわる謝罪だけでなくそれに付随する不祥事についても企業形態や企業責任が問題視され、謝罪の発端となる事象が時間と共に変化し複雑になっていく。そして被害者もコミュニティを結成しながら JR 西日本旅客鉄道株式会社（以下、JR 西）について謝罪や企業罰を求め変化していった。このように事象に関わる加害者と被害者の関係が謝罪行為を介して変化し継続することは、風化への直接的な対抗に繋がっているのではないかと考えた。

この考えについて示すために本論文では何を「謝罪」として抽出し観察するのか、謝罪の定義について土井・高木（1993）らの先行研究をもとに謝罪の 8 つの様式を示しまた、「風化」についても同様に、矢守（1996）らの先行研究をもとに定義し、本論文では「比喩的に用いられる、物事が人の視野から薄れ消えてしまうこと」「事象の意味づけの完了と定着した状態」とした。

また本論文においてはメディア効果論については言及せず、あくまで「社会を映す鏡」として新聞記事から事故について観察を行い、JR 西による事故後の対応とそれに対する被害者側の反応、逆に被害者側の要求とそれに対する JR 西の対応を分析した。

その結果 JR 西による謝罪行為が言葉によるものから具体的な行為へと変化し、また JR 西による行為に対して被害者側が主体的にコミュニティを編成し対応していく様子が 3 つの観点から見ることができた。そしてそのように時間の経過とともに慰霊の場や謝罪の発端となる事象が変化していき、福知山線脱線事故が単なる鉄道事故として収束せずに過去（事故被害者）に向けた償い、現在（生存被害者）に

向けた補償、未来（鉄道利用者）に向けた具体的な謝罪行為や企業努力を行う発端となり続けていることがわかった。

事故現場の保存という課題に関してもJR西と被害者は相互に働きかけを行いながら実現に向けて取り組んできたことが観察された。現場の保存によって、事故の記憶を被害者だけでなくこれまで周縁とされてきた一般の人々にとっても共有され、教訓を示す場として後世に残される。こうした場が整備され、亡くした肉親の死を単なる事故死ではなく社会的な記憶に昇華させるということについて「無駄にしない」という動機になっているのではないか。人々の間で事故の意味が定着しきらずに議論が続けられることになり、結果として風化を阻んでいるともいえるだろう。

謝罪行為を企業が行うことは、その企業の社会的印象、CSR などの点から失った効用について補填されるという企業の利害に基づく行為だけではなく、関わる被害者と共にその事象により生まれた教訓をどのように社会に昇華するか模索しあうことに繋がっているようだ。今回についていえば、JR 西にとっての効用つまり企業イメージの改善や利用客の回復という利益と、被害者にとっての効用つまり失った肉親の記憶の昇華や教訓の社会的共有という行動の動機の解決がそれぞれ独立したものではなく、相互に利害が関わり複雑な事象であることから単純に意味づけが完了しない。

遺族が望む「風化させない」「死を無駄にしない」という状態は、加害者と被害者の相互による積極的な働きかけのもとに実現するのではないだろうか。